

立夏のほととぎす

—— 家持と暦 ——

小林 真由美

—
霍公鳥ほととぎすは、必ず立夏の日によつて来て鳴き出すという。卯の花とともに夏の訪れを告げ、花橘に戯れて鳴きとよもす。

『萬葉集』の中で、「ほととぎす」は最も多く詠まれた鳥である。一字一音仮名、または「霍公鳥」と漢字表記されている。なかでも大伴宿禰家持は、『萬葉集』の百五十五首のほととぎすの歌のうち、六十四首の歌を詠んでいる。「霍公鳥者、立夏之日、来鳴必定」と述べたのは、家持である。(巻第十七、三九八三・三九八四左注)

ホトトギスはカッコウ目カッコウ科カッコウ属の鳥で、五月頃、インド・東南アジア方面より東アジア・日本

に飛來して繁殖する夏鳥である。全長約二十八センチ、頭、背部は灰青色、胸部は白で黒の縞がある。カッコウ目の鳥は世界に二科三十六属百四十九種いるが、日本に生息するのは、ホトトギス (*Cuculus poliocephalus*)・カッコウ (*Cuculus canorus*)・ツツドリ (*Cuculus saturatus*)・ジュウイチ (*Cuculus fugax*) の四種。四種共にカッコウ科カッコウ属の夏鳥で、他の鳥の巢に卵を産み付け育てさせる「托卵」の性質があり、ホトトギス・カッコウ・ツツドリの三種は特に姿がよく似ている。ホトトギスが三種のうちもつとも小型で、「テツペンカケタカ」などと聞きなされる鳴き声である。次に大きいのがツツドリで「ポポ、ポポ」と鳴き、カッコウは最も大型、「カッコー」と鳴く。ジュウイチは「ジュイチー」と鳴き、背が黒く胸部に縞がない。

天平十三年(七四一)四月二日、遷都して間もない恭仁京(京都府相楽郡)に赴任している大伴家持のもとへ、平城京の弟大伴書持からほととぎすの二首の歌が届けられた。翌日、家持は三首返している。

ほととぎす
霍公鳥を詠む歌二首

橘は常花にもがほととぎす住むと来鳴かば聞かぬ日なけむ(卷第十七、三九〇九)

珠に貫くあふちを宅いへに植いえたらば山霍公鳥ほととぎす離かれず来むかも(三九一〇)

右、四月二日に、大伴宿祢書持、奈良の宅より兄家持に贈る。

橙橘初めて咲き、霍公鳥ほととぎす翻り嚶なく。此の時候に對ひ、詎志あにを暢あべざらむや。因りて三首の短歌を作り、以て鬱結の緒を散らさまくのみ。

あしひきの山辺に居ればほととぎす木の間立ち潜くき鳴かぬ日はなし(三九一一)

ほととぎす何のこころそ橘の玉貫く月し来鳴きとよむる(三九一二)

ほととぎすあふちの枝に行きて居ば花は散らむな珠と見るまで(三九一三)

右、四月三日に、内舍人大伴宿祿家持、久邇の京より弟書持に報へ送る。

聖武天皇は前年十月、藤原広嗣の乱をきっかけに平城京を離れて、伊勢・美濃・近江・山背と行幸を続け、十二月に恭仁京に至り、新京の造営を始めた。内舍人として天皇に近侍していた家持は、半年も妻大伴坂上大嬢のいる平城京に帰っていないことになる。平城京を恋しがっているであろう兄をなぐさめるために、書持は兄の好きなほととぎすの歌を送ったのだろう。

書持の歌は、橘が一年中咲いている花であってほしい。ほととぎすが住むと言つて来て鳴けば、その声を聞かない日はないだろう(三九〇九)。庭に棟おうち(梅檀)を植えたなら、山ほととぎすはいつもやってくるだろうか(三九一〇)。ほととぎすを恋う歌である。

家持は題詞に、橙橘が咲きほととぎすが鳴くこの季節に、歌を詠んで、「鬱結之緒」、鬱々としてふさいだ心を散じようと記している。家持が初夏の氣候と風物に強い愛着を感じていたことが知られる。山辺近くにいたので、ほととぎすが木の間をかいくぐつて鳴かない日はない(三九一一)。ほととぎすはどういう気持で、橘の花を玉にぬく月だけ、やつて来て鳴くのだろうか(三九一二)。ほととぎすが棟の枝に飛んでいつてとまったなら、花は散るだろうなあ、玉のように見えるまでに(三九一三)。

天平十八年（七四六）六月、家持は越中国の国守に任せられ、越中国府（富山県高岡市伏木）に下向した。九月、弟書持の訃報を受けた。家持は「長逝せる弟を哀傷かなしぶる歌一首并せて短歌」（卷第十七、三九五七〜三九五九）を残している。

天平十九年（七四七）、ほととぎすの鳴き出す季節がめぐってきた。

立夏四月、既に累日なほを経ぬるに、由なほし未だ霍公鳥の喧なくを聞かず。因りて作る恨みの歌二首

あしひきの山も近きをほととぎす月立つまでになにか来鳴かぬ（卷第十七、三九八三）

玉に貫く花橘を乏しみしこの我が里に来鳴かずあるらし（三九八四）

霍公鳥は、立夏の日に、来鳴くこと必定なり。又越中の風土は、橙橘まねのあること希まれらなり。此れに因りて、大伴宿禰家持、懐に感発して、聊かにこの歌を裁つくる。三月二十九日

ほととぎすは必ず立夏の日に鳴くことになっている。しかし、立夏から数日経つてもほととぎすは鳴かない。越中国の国守館は、二上山の麓にある。山も近いというのに、四月になるまでに何故鳴かないのか（三九八三）。橘が少ないので、私の里に来て鳴かないらしい（三九八四）。

ほととぎすが鳴かない原因は都と越中の風土の違いにある。畿内では当たり前のように豊かに咲いていた橘が、越中には少ない。「恨み」は望郷の念につながる。前歌の「恋緒を述ぶる歌一首并短歌」（三九七八〜三九八二）に

は、「霍公鳥 来鳴かむ月に いつしかも 早くなりなむ」「吾を待つと なすらむ妹を 会ひて早見む」とある。家持は「霍公鳥来鳴かむ月」である四月に税帳使に決定し、五月に上京している。ほととぎすの声を待つ思いには妻への恋しさもこもっている。

また、家持はかつて弟書持と贈り合ったほととぎすの歌を思い出しているのではないだろうか。六年前、単身恭仁京に暮らしていた自分を氣遣って、歌を贈ってくれた弟は、前年の秋に亡くなってしまった。心優しく、風雅を分かち合った弟である。今も恭仁京と同じように山の近くに住んでいるのに、ほととぎすの声は聞こえてこない。あのとぎと違い、花橘が咲いていないからだろうか。ほととぎすの不在への恨みには、妻との別居の孤独だけではなく、弟の死による喪失感も重ねて読み取ることができないのではないだろうか。

三九八三番の題詞に「立夏四月、既経累日」とある。しかし左注には「三月二十九日」という日付があり、まだ「四月」ではない。題詞と左注の日付に食い違いが生じている。

『校本萬葉集』によると、諸本のこの箇所(2)に異同はない。前歌の「恋緒を述ぶる歌」(三九七八〜三九八二)の左注には「三月二十日」、後の歌の「二上山の賦」(三九八五〜三九八七)の左注には「三月三十日」と記されている。三九八三・三九八四の左注の「三月二十九日」は妥当と思われる。

契沖は題詞について、「立夏四月ト云ハ四月節ナリ」(『代匠記 精選本』)とする。「四月節」とは二十四節気の「立夏四月節」である。「四月」を太陰暦の十二ヵ月(暦月)の四月と考えるのではなく、「立夏四月節」の意での四月(節月)とすれば、題詞の「三月二十九日」との齟齬はなくなる。

二十四節気は、冬至を基準にして一太陽年を二十四等分した一種の太陽暦である。それぞれの季節を表した名

称に十二カ月の「節氣」と「中氣」を割り当てて、立春正月節・雨水正月中・啓蟄二月節・春分二月中・清明三月節・穀雨三月中と呼称する。立夏四月節は、現行の太陽暦の五月六日頃に当たる。

中国から伝えられ、古代から近世まで使用されていたいわゆる旧暦は、月の形の変化の一周期（二朔望月）を基準にした太陰暦と、二十四節氣の太陽暦を併用する太陰太陽暦だった。太陰暦では、一朔望月が約二九・五三日であることから、一カ月を二十九日（小の月）または三十日（大の月）に設定し、基本的に一年を十二朔望月にする。すると、十二カ月で約三百五十四日になるが、一太陽年は約三百六十五日であるから、毎年約十一日ずつ季節がずれていくことになる。そこで閏月を数年置きに挿入することによって、季節のずれを調整していた。

雨水正月中、春分二月中などの節月の中氣と暦月を合わせ、中氣のない月（無中氣月）が生じた場合その月を閏月にする。つまり、二十四節氣の中氣は必ず暦の月と一致していたが、節氣は朔日の前後半月の間に入ることになり、年内に立春正月節が来たり、三月の内に立夏四月節がくることも珍しくなかったのである。

『代匠記』のように「立夏四月節」であれば、左注の三月二十九日との食い違いはない。しかし契沖以後、「立夏四月」が「立夏四月節」であることを注した注釈書は少なく、四月から夏とする觀念があつたためなどと、暦月の四月で説明する場合がほとんどのようである。橋本万平氏は次のように述べている。

これを太陰暦では四月から夏であるから、この文字があると説明している人があるが誤りである。この歌が作られたのは、太陰暦で天平十九年三月二十九日でまだ四月になっていない。この日は現行暦にすると五月十六日に当り、立夏は毎年五月六日であるから、それから十日も経っており累日を経て誤りがないのである。⁽⁴⁾

家持は、立夏四月節には必ずほととぎすが鳴く、と主張する。天平二十年（七四八）四月一日の歌（四〇六八）、天平勝宝二（七五〇）年三月二十三日の歌（四一七一）は、立夏四月節の前夜、ほととぎすの初音を待ち恋う歌である。

居り明かしも今宵は飲まむほととぎす明けむ朝は鳴きわたらむそ 二日は立夏の節に応る。故に明けむ且に喧かむといふ

二十四日は立夏四月節に^{あは}応る。これに因りて二十三日の暮に、忽ちに霍公鳥の暁に喧かむ声を思ひて作る歌二首

（卷第十八、四〇六八）

常人も起きつつ聞くそほととぎすこの暁に来鳴く初声

ほととぎす来鳴きとよめば草取らむ花橘を宿には植ゑずて

『養老令』⁽⁵⁾雑令によると、毎年、陰陽寮において曆博士が十一月一日までに翌年の曆を作り、奏進することが規定されていた。

天皇に奉る具注御曆二巻と七曜御曆一卷、内外の諸司に頒布される頒曆百六十六巻。主要官庁は頒曆を一本ずつ賜ると、必要な本数を別写して配下の寮司・郡司に配ることになっていた。国守在任中の家持は、毎年頒曆一本が朝廷から国府に届けられると、年内に郡司等に配るための曆を作成するという職務があったのである。

都から越中に曆が届けられるのは、十一月何日頃だっただろうか。都から越中へは十日ほど要したようである。家持が季節や曆日に鋭敏な歌人であったことは、つとに指摘されている。家持は、都から真新しい曆が届くのを心待ちにしていたのではなかったか。

諸司に配られる頒曆は具注曆だった。上段に日・干支・納音・十二直、中段に二十四節氣、下段に曆注を書き入れる形式である。つまり、二十四節氣は家持が手にする曆に必ず書き入れられていたということである。曆が届けられる頃、越中の旧曆十一月は深い雪と厚い雲に閉ざされている。家持は来年の曆を広げ、青葉の中でほととぎすが鳴き出す立夏の日を待ち遠しく数えたのではないだろうか。

正倉院には天平時代の具注曆の断簡が三種伝存している。天平十八年（七四六）二月七日〜三月二十九日、天平二十一年（天平勝宝元年、七四九）二月六日〜四月十六日、天平勝宝八年（七五六）歳首〜正月二十六日・三月三日〜四月十八日のものである。前述のように具注曆には節氣も記載されていたので、天平勝宝元年は四月十三日、天平勝宝八年は三月三十日が立夏であったことを確認することができる。

十三日丙午水除立夏四月節 歳博（天平勝宝元年四月）

三十日壬午木満立夏四月節 歳後天恩九坎厭（天平勝宝八年三月）

両方の曆に「立夏四月節」とある。家持の曆にも同様に記されていたはずである。三九八三番の題詞は「立夏四月」。「立夏四月節」は、「立夏」「立夏節」と省略することがあっても、「立夏四月」と省略することがあるだろうか。むしろ、曆月と二十四節氣の節月の混同を避けるため、「四月」と「四月節」ははっきりと書き分けようとする意識が働くのではないだろうか。家持の使用例を見ても、前掲傍線部四〇六八番の注には「立夏節」、四一七一番の題詞には「立夏四月節」とある。

「立夏四月既経累日」という本文において、「既」「節」の字形の類似に注目したい。竹冠を除くと、「即」と「既」である。「節」の誤字または脱字を想定し得るのではないか。『校本萬葉集』によると諸本に異同はないが、

『萬葉集』書写の早い段階、あるいは『萬葉集』編纂時の誤脱も可能性としてあり得る。「立夏四月既経累日」と一見文脈が通りそうな句であるため、そのまま転写されてきたと考えることができる。

「立夏四月節既経累日」↓「節」が「既」に誤写↓「立夏四月既経累日」

または、「節既」という類似した字形の連続によって、「節」が見落とされ、脱落。

「立夏四月節既経累日」↓「節」が脱落↓「立夏四月既経累日」

現存する『萬葉集』の本文「立夏四月既経累日」は、実はこのような経緯をたどって成立した異文ではないか。原文は「立夏四月節既経累日」または「立夏四月節既経累日」ではなかっただろうか。

三

家持は立夏に「霍公鳥」が鳴くのは「必定」であるという。

ホトトギスの漢名は子雋・子鵠・杜鵑・杜宇・不如帰・蜀魂・時鳥・子規など数多い。『本草綱目』『杜鵑』の項に「鵠与子雋子規鵠催帰諸名。皆因其声似。各随方音呼之而已」（釈名、時珍）とあるように、ホトトギスの名は各地方によってそれぞれ異なるが、皆鳴き声から命名されたものらしい。和名のホトトギスも、カラス・カケス・ウグイスなどと共にスの付く鳥名は擬声語起源だといわれている。

ホトトギスの漢名のうち、杜鵑・杜宇・不如帰・蜀魂・子規などは蜀帝杜宇化鳥伝説に基づいている。蜀王杜宇は皇帝と号した。宰相の留守中にその妻と密通して帝位を逐われ、蜀王の魂は恥じてホトトギスに化して飛び

去つたという。植木久行氏によれば、ホトトギスが詩語として定着するのは中唐・晩唐だということである。⁽⁶⁾漢詩では、ホトトギスの口の中が赤いところからの啼血のイメージが強く、鳴き声は旅愁や惜別を象徴する声としてとらえられることが多いという。我が国において、中国での詩語としての定着よりも早く、『萬葉集』に多く詠まれていること、漢詩におけるイメージと異なり、和歌では「ほととぎす」の声に対して親しみやあこがれの感情を詠んでいる点などを指摘している。

漢籍では晩春から鳴き出すとされる場合が多いようである。『文選』李善注では三月から、『荊楚歲時記』では、三月三日に初めて鳴くとある。

鸚鵡鳴而不芳：善曰：臨海異物志二曰ク、鸚鵡、一ノ名ハ杜鵑。三月ニ至リテ鳴キ、昼夜止マズ。夏ノ末ニ乃チ止ム。

（『文選』卷第十五、張平子「思玄賦」）

三月三日、杜鵑、初めて鳴く。田家之を候とす。此の鳥、昼夜に鳴く。口赤く、天に上りて恩を乞う。章陸子の熟するに至れば乃ち止む。

杜鵑初めて鳴く。先ず聞く者、離別を主り、其声を学び、人をして血を厠溷かわやの上に吐かしむ。聞く者不祥にして、之を厭はなう法、当に狗いぬの声を為り以て之に応ずべしと。
（荊楚歲時記「三月」）

山石榴。一名山躑躅。一名杜鵑花。杜鵑啼時花撲撲。九江三月杜鵑来。

（『白氏文集』卷第十二、「山石榴寄元九」）

杜鵑出蜀中。今南方亦有之。状如雀鷄。其色惨黒。赤口有小冠。春暮即鳴。夜啼達旦。鳴必向北。至夏尤甚。昼夜不止。其声哀切。

（『本草綱目』「杜鵑」集解、時珍）

青木正児氏は、『漢書』揚雄伝「反離騷」の顔師古の注に、ホトトギスが「立夏を以て鳴く」という記述があることから、家持の説が漢籍に典拠を求められるものであることを明らかにしている。⁽⁷⁾

鳩鳥、一名買鏡、一名子規、一名杜鵑、常に立夏を以て鳴く、鳴けば則ち衆芳皆歇む

（『漢書』卷八十七、揚雄伝「反離騷」顔師古注）

関守次男氏は、「立夏にほととぎすが必ず鳴く」という説は七十二候の「螻蟈鳴」を日本的に修正したのではないかと推測している。⁽⁸⁾七十二候は、二十四節気をさらに三分（初候・二候・三候）したものである。立夏四月節には、初候螻蟈鳴、二候蚯蚓出、三候大瓜出（宣命暦）が配される。

ホトトギスがインド・東南アジアから日本に飛来するのは、現行暦の五月中旬頃である。漢籍に多い旧暦三月（現行暦四月頃）よりも、「立夏」（現行暦五月六日）前後に鳴くという顔師古の説の方が、日本の風土に合っている。

漢詩では蜀（今の四川省）の鳥とされる場合が多い。ホトトギスは、中国ではモンゴルやチベットなどの北部・西部と、福建省や広東省などの東南部を除いて分布し、海南島においては留鳥である。現代の鳥類図鑑に青島に五月末に飛来したという記録があるが、⁽⁹⁾蜀地方は南部になるため、渡来の時期が早いのだろうか。家持は、三月渡来説も知りつつ、日本の実状に即して立夏渡来説を選択したのだろう。

三九八三番が詠まれた天平十九年（七七四）三月は、大の月で三十日までであり、月が改まるまでにまだ一日を残している。しかし「月立つまでになにか来鳴かぬ」と、あたかも晦のような表現である。立夏節を過ぎて四月に至るまでの、ほととぎすの初音を待つ待望と失望の交錯する気持を「月立つまでになにか」に込めているのだ

ろう。

二十四節気による四季と、暦月を三カ月ずつ配した四季とのずれがもつとも意識されるのが、年が改まる前に立春正月節がやって来る年内立春であろう。暦月による四季では十二月までが冬なので、年内立春では冬のうちに春が来てしまうことになる。天平宝字元年（七五七）の暮れは年内立春だった。十二月十八日、三形王の邸宅で行われた宴で、立春が詠まれている。実際の立春は二十三日頃だったらしいが、立春を歌題として集まった宴会だったのかもしれない。

十二月十八日に大監物三形王の宅にして宴する歌三首

み雪降る冬は今日のみ鶯の鳴かむ春へは明日にしあるらし（巻第二十、四四八八）

右一首、主人三形王

うちなびく春を近みかぬばたまの今宵の月夜霞みたるらむ（四四八九）

右一首、大藏大輔甘南備伊香真人

あらたまの年行き反り春立たばまづ我がやどに鶯は鳴け（四四九〇）

右一首、右中弁大伴宿祢家持

その五日後、実際の立春にあたるらしい十二月二十三日に、今城真人宅で宴会があった。家持は、『古今和歌集』冒頭歌の在原元方の「年の内に春は来にけりひととせを去年とやいはむ今年とやいはん」に先だつて「年内立春」を詠んでいる。

廿三日に、治部少輔大原今城真人の宅にして宴する歌一首

月数めばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか(巻第二十、四四九二)

右一首、右中弁大伴宿祢家持の作

同年の秋には、立秋も歌に詠み込んでいた。歌に日付はないが、天平宝字元年(天平勝宝九年)の立秋は七月十一日頃だったという。

時の花いやめづらしもかくしこそ見し明らめめ秋立つことに(四四八五)

右、大伴宿祢家持作る。

毎年忘れずに咲く季節の花を、「いやめづらしも」と称えている。「めづらし」は「愛づ」から派生した語で、目新しいものに対して心がひかれること。「素晴らしい」の意、「まれである」の意、「懐かしい、久しぶり」の意などに用いられている。

天平勝宝五年(七五三)正月の、家持の大雪の歌。

大宮の内にも外にもめづらしく降れる大雪な踏みそね惜し

(巻第十九、四二八五)

家持は、一年を経てまた巡り会うことのできた秋の花や、大和ではまれな大雪を「めづらし」と歌に詠み、夏のほととぎすへの思いもまた「めづらし」と詠んだ。天平二十年(七四八)の「独り幄の裏に居りて、遙かに霍公鳥の喧くを聞きて作る歌一首并せて短歌」、

：卯の花の 咲く月立てば めづらしく 鳴くほととぎす あやめぐさ 珠貫くまでに 昼暮らし 夜渡し

聞けど：(巻第十八、四〇八九)

天平勝宝二年(七五〇)の「霍公鳥と時の花を詠む歌一首一首并せて短歌」、

時毎に いやめづらしく 八千種に 草木花咲き 鳴く鳥の 声もかはらふ 耳に聞き 眼に視ることに：
(卷第十九、四一六六)

時毎にいやめづらしく咲く花を折りも折らずも見らくしよしも (四一六七)

家持にとつて、四季折々の景物の新鮮さ、慕わしきは、「めづらし」という形容詞が言い得ていたのであろう。

また、「霍公鳥いやなつかしく聞けど飽き足らず」(卷第十九、四一七六)、「初声を聞けばなつかし」(同、四一八〇)、「聞けばなつかし」(同、四一八一)と、家持にとつてほととぎすの声は「なつかし」いものでもあった。

「時の花いやめづらしもかくしこそ見し明めめ」(卷第二十、四四八五)——季節の花はなんと素晴らしいのか。

このように、見て心を晴れ晴れとさせよ——。季節の風物の「めづらし」さは、暗くこもりがちな心に清新な光を差し込んでくれるものだった。恭仁京でほととぎすの歌を詠んだときも「鬱結之緒」(卷第十七、三九一題詞)を散ずると述べている。家持は、季節を賞美し、詩歌にうたうことに、官人生活の中の慰安を見出していたのだらう。

四

前述のように、『萬葉集』では「ほととぎす」は一字一音仮名表記のほか、漢字表記は「霍公鳥」に統一されている。「霍」は「あはただしくとぶこゑ」(『大漢和辞典』)。観智院本『類聚名義抄』に「霍霍今正呼郭反飛声」(僧中一三五)とある。「郭」と音が通じ、「郭公鳥」(カッコウ)の用字をかえたものと考えられている⁽¹⁰⁾。

ホトトギスのように、カッコウの漢名も鳩鳩・鷓鴣・布穀・獲穀・郭公など数多く、『本草綱目』「鳩鳩」の項の時珍の釈名には「布穀名多。皆各因其声似而呼之」と、異名が多いが皆鳴き声にちなんだものであると記されている。

日本の古代語でカッコウを確実に示す鳥名はなく、古歌の「よぶこどり」「かおどり」「はこどり」がカッコウであるという説もある。「かつこう（くわつこう）」の名で呼ばれるようになるのは鎌倉時代以降のようである。鳴き声から「かつこどり」「かんこどり」「かつぼうどり」などとも呼ばれ、また鳴き出すのが農耕を始める時期であることから、「粟まき鳥」「豆まき鳥」などという名もある。

平安時代では、「ほととぎす」を「郭公」と表記することが普通に行われていた。観智院本『類聚名義抄』において「時鳥」「歳鳥」「郭公」「鷓鴣」が「ほととぎす」と訓じられているが、「時鳥」「歳鳥」はホトトギス、「郭公」「鷓鴣」はカッコウの漢名。『新撰萬葉集』では、「ほととぎす」の和歌に「郭公」の漢詩を対応させ、『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』では「郭公」の題でほととぎすの和歌を挙げている。『和名類聚抄』でも郭公（鷓鴣鳥）の和名は「ほととぎす」である。⁽¹⁾

鷓鴣鳥 唐韻云。鷓鴣藍縷二音。和名保度々木須今之郭公也（『和名類聚抄』卷第十八）

青木氏は前掲論文で、カッコウを示す「郭公」という漢字表記は唐代以後のものであることを指摘し、『本草綱目』に引かれている『本草拾遺』の「布穀は江東に呼んで郭公と為す。北人は撥穀と名づく」という例を挙げている。陳蔵器の『本草拾遺』は、開元年間（七一三～七四一）成立、『和名類聚抄』に引かれる『唐韻』は天寶十年（七五二）成立で、『萬葉集』の「霍公鳥」の典故を両書に求めるのは難しいかもしれないが、「郭公」にも

とづいた当時の最新の表記法であつたことは確かだろう。

しかし、なぜ日本では「ほととぎす」の漢字表記にカッコウ（郭公）の漢名が用いられたのか。「恐らくは、ホトトギスとカッコウの姿が似ていて、混同したもので、あるいは、^レほととぎす」と呼んでいたものの一部にカッコウが含まれていたのかもしれない」（『図説日本鳥名由来辞典』「かつこう」の項）と考えられ、青木氏は「ほととぎす」は実はカッコウではないかとの説を述べている。

萬葉の保登等芸須は今謂ふところのホトトギスではなく、実はカッコウであつて、集中に霍公鳥の字を当てたのは正しかったのだと主張しても、必ずしも痴人夢を説くの類として一笑に附さるべきではないかも知れぬ。⁽¹²⁾

また、川口爽郎氏は「萬葉集のほととぎすはホトトギス科の四種現在のホトトギス・カッコウ・ツツドリ・ジユウイチの総名」と述べる。⁽¹³⁾ただし、ジユウイチだけは体色も異なり、「生息地も一般的に言つて標高五〇〇メートル以上の深い山であるので、人目に触れることも少なく、当時のほととぎすとしては考慮に入れないでもよいと思われる」。川口氏は、鳴く時刻、渡りの時期、地勢などから、『萬葉集』の霍公鳥の歌がホトトギス、カッコウ、ツツドリであるかの識別を試みている。夜を通して鳴くのはホトトギス、暁から鳴き出すのはカッコウ。渡りの時期はツツドリが四月中旬で最も早く、カッコウが五月初・中旬で、ホトトギスが五月中旬から下旬。「越中の国での立夏に鳴く鳥はカッコウのような気がする」と述べている。

川口氏が述べるように、「ツツドリ」も「カッコウ」「ホトトギス」と混同されることが多かつたようである。

「布穀」は「布穀は江東に呼んで郭公と為す。北人は撥穀と名づく」（『本草拾遺』）と「カッコウ」であるが、「ツ

ツドリ」(古くは「ふふとり」とも)とされる場合も多かった。

布穀鳥兼名苑云鷓鴣一名鷓鴣虚葛吉菊四音和名布々止利布穀也

(『和名類聚抄』卷第十八)

貝原益軒の『大和本草』(宝永六年刊)には「蚊母鳥(つゝとり)」の項に、

予処々の民俗の言を聞しに、杜鵑の雌也と云へり。其声不喧、閑寂なり。其なく時杜鵑に同じく、其形も似たり。其音不同といへども、其風韻同じ。

とある。⁽¹⁴⁾カッコウ・ツツドリが同じ鳥の名にされており、当時ホトトギスをカッコウの雌とする地方があったらしいことがわかる。「其なく時杜鵑に同じく、其形も似たり。其音不同といへども、其風韻同じ」という説明が、カッコウ・ツツドリ・ホトトギスが混同されやすい理由を言い得ているだろう。

日本に生息するカッコウ目の鳥は四種のみであることを前述したが、中国においては一科九属十七種に及ぶ。カッコウ属は六種である。⁽¹⁵⁾

鷹鵒(オオジュウイチ)

棕腹杜鵑(ジュウイチ)

四声杜鵑(セグロカッコウ)

大杜鵑(カッコウ)

中杜鵑(ツツドリ)

小杜鵑(ホトトギス)

日本に飛来しない四声杜鵑(セグロカッコウ)は、ツツドリに特に姿が似ているようである。ほかに八声杜鵑(ヒメカッコウ)、栗斑杜鵑(クリイロヒメカッコウ)、小鴉鵒(バンケン)などがあるが、すべて名に「杜鵑」「鵒」が付されている。『本草綱目』「杜鵑」「状如雀鵒。而色惨黒、赤口有小冠」(集解、時珍)という説明は、カンムリカッコウ(紅翅鳳頭鵒)のものらしい。⁽¹⁶⁾近代の中国の鳥類図鑑に「杜鵑 亦名郭公、或布穀」という記述がみ

られる⁽¹⁷⁾。中国においてもカッコウ科の鳥は混同される傾向があるようである。

上代語「ほととぎす」が、カッコウ・ツツドリ・ホトトギスの総称だとすると、『萬葉集』の「ほととぎす」は「テツペンカケタカ」と鳴く鳥であつたり「カッコウ」と鳴く鳥であつたりする。ホトトギスの声とカッコウの声では、歌の印象も大分変わつてくるだろう。また、『萬葉集』は、中唐以降の漢詩におけるホトトギスの哀切なイメージが影響する以前であるということを、念頭においておく必要があると思われる。

川口氏の論に指摘されていないが、托卵の習性もカッコウ科の識別に役立つ。次の虫麻呂、家持の歌などは、ホトトギスに限定できるようである。

鶯の 卵の中に 霍公鳥^{ほととぎす} 独り生まれて なが父に 似ては鳴かず なが母に似ては鳴かず…(高橋虫麻呂、巻第九、一七五五)

…木の暮れの 四月し立てば よごもりに 鳴く霍公鳥 いにしへゆ 語り継ぎつる 鶯の うつし真子か
も…(大伴家持、巻第十九、四一六六)

日本のカッコウ科の鳥のうち、ウグイスに托卵するのはホトトギスで、卵の色は同じチヨコレート色である。カッコウ科の鳥はそれぞれ托卵相手に似た色の卵を産むことが特徴で(卵擬態)、ツツドリは白地に褐色の小斑のある卵をセンダイムシクイやメボソムシクイなどに産み付け、カッコウは、モズ・オオヨシキリ・ホオジロなどの巢にそれぞれに似た色や斑の卵を産み付ける。

一方、家持の「暁に名のり鳴くなるほととぎす」(巻第十八、四〇八四)、「この暁に來鳴く初声」(巻第十九、四一七二)は、暁から鳴き出すカッコウの声を詠んでいるようである。家持のほととぎすの歌にはホトトギスやカ

ツコウが混在しているようであるが、「霍公鳥」と表記した家持にとつての「ほととぎす」は、カッコウがより強い印象を占めていたのではないだろうか。

五

『荆楚歳時記』には、前掲のように三月に「杜鵑」（ホトトギス）の記事があるほかに、四月に「獲穀」（カッコウ）の記事がある。

四月、鳥あり、獲穀と名づく。その名自ら呼ぶ。農人、此の鳥（の鳴く）を候ちて、則ち犁杷もて岸に上る。

『爾雅』を按ずるに云く。鳴鳩鵠鞠と。郭璞云。今の布穀なり。江東は獲穀と呼ぶと。崔寔の『政論』に云わく。夏扈趨して耕鋤すと。即ち窃脂玄鳥、獲穀と呼ぶ。則ちその夏扈なり。

『荆楚歳時記』ではカッコウは四月の鳥。⁽¹⁸⁾家持は、題詞左注でほととぎすは「立夏に来鳴く」とするが、歌の中では「四月に鳴く」とすることが多く、『荆楚歳時記』に一致している。

卯の花の咲く月立ちぬほととぎす来鳴きとよめよ含みたりとも （卷第十八、四〇六六）

卯の花の 咲く月立てば めづらしく 鳴くほととぎす あやめぐさ 珠貫くまでに昼暮らし 夜渡し聞

けど… （同、四〇八九）

…木の暮れの 四月し立てば 夜ごもりに 鳴くほととぎす… （卷第十九、四一六六）

月立ちし日より招きつつうち偲ひ待てど来鳴かぬほととぎすかも （同、四一九六）

『荊楚歲時記』は、南北朝時代の年中行事を季節順に記した歳時記で、揚子江中流域（現在の湖北省・湖南省周辺）の民間の習俗を伝えている。宗慄（保定年間、五六一〜五六五没）著の『荊楚記』に、杜公瞻が注釈したもので、大業年間（六〇五〜六一七）成立。日本への伝来は奈良朝初期といわれる。⁽¹⁹⁾

家持が『荊楚歲時記』を読んでいた可能性はある。『荊楚歲時記』には、家持が『萬葉集』に詠んだ元日・上巳・七夕などの節日の行事が記されている。当時は、中国の年中行事を記した書物として、『礼記』『月令』や、隋の杜台卿（杜公瞻の叔父）の歳時記『玉燭宝典』などが著名だったと思われるが、民間行事を記した『荊楚歲時記』も興味を引くものではなかっただろうか。

『荊楚歲時記』によると「農人、此の鳥（の鳴く）を候ちて、則ち犁杷もて岸に上る」、農夫たちはカッコウの声を待つて農作業を始めるといふ。次の『古今和歌集』の歌が想起される。

いくばくの田を作ればかほととぎすしでの田長を朝な朝な呼ぶ（一〇一三）

「しでの田長」を呼ぶ「ほととぎす」は、早起きのカッコウだったかもしれない。「来、来」という呼び声か。

家持はほととぎすは「暁に名のり鳴く」といふ。天平二十一（七四九）年、越中から平城京の大伴坂上郎女への返歌二首に添えた歌。

別なる所心一首

暁に名のり鳴くなるほととぎすいやめづらしく思ほゆるかも

右、四日に使に付して京師に贈り上す

（巻第十八、四〇八四）

同年（天平感宝に改元）五月十日の「独り幄の裏に居りて、遙かに霍公鳥の喧くを聞きて作る歌一首并せて短歌」

(四〇八九〜四〇九二)の一首。

卯の花のともにし鳴けばほととぎすいやめづらしも名のり鳴くなへ

(卷第十八、四〇九二)

『萬葉集』でほととぎすが「名のり鳴く」というのは以上の二首のみだが、平安朝にも見られる表現である。

夕暮れのほどに、ほととぎすの名告りてわたるも、すべていみじき

(『枕草子』第四十六段)

あしひきの山ほととぎす里なれてたそかれ時に名告りすらしも

(『拾遺和歌集』卷第十六、一〇七六)

「名のり鳴く」とは、ほととぎすの名が擬声語起源で、ホトトギスの鳴き声を「ホトトギス」と聞きなしているからだと解釈されている。⁽²⁰⁾しかし、「ほととぎす」がカツコウを含む鳥名らしいことをふまえると、『荊楚歳時

記』の次の一節に注目される。

四月、鳥あり、獲穀と名づく。その名自ら呼ぶ。

「獲穀」という名を「その名自ら呼ぶ」。「獲穀」「郭公」などの漢名は擬声語による命名らしいが、日本人の耳にも確かに「カツコウ」の鳴き声はそう聞こえるのではないか。家持の「名のり鳴くなる」(四〇八四)という伝聞の表現は、「自分の名を(漢名で)名のるといわれている」といった意味合いが込められているのではないか。「名のり鳴く」とは「獲穀!」「郭公!」と名のることとしたら、何か明るいユーモラスな情景が浮かんでくる。

『萬葉集』の「名のり鳴く」は、家持のみの表現である。漢籍から得た知識が、なじみの季節の風物に新しい発見を呼んだ。その新鮮な驚きが「いやめづらし」という感想ではなかったか。四〇八四番は、叔母大伴坂上郎女にあてた歌である。漢学の素養深く、風趣を解する叔母は、家持の機知を解して微笑してくれたことだろう。

越中では立春はまだ深い雪の中である。陽光溢れる立夏を迎える喜びは大きかっただろう。家持にとつてほととぎすの声は「聞くごとに心つごきて」(四〇八九)と心を浮き立たせるもの、「あはれの鳥と言はぬ時なし」(同)といつても慕わしい鳥だった。家持は大伴氏の長として一族の将来を案ずることの多い身である。そして、これからも地方官として、安住できずに各地を転々とすることになるのかもしれない。夏の到来を告げるほととぎすの声は、実生活の憂愁をひととき晴らしてくれる、限らない喜びの声だったようである。

行くへなくあり渡るともほととぎす鳴きし渡らばかくやしのはむ(巻第十八、四〇九〇)

注

- (1) 『日本動物大百科 鳥類II』(一九九七、平凡社) 参照。
- (2) 『類聚古集』に、題詞と左注を混ぜ合わせたような「霍公鳥未立夏必来鳴而四月経累日未聞又越中風土希橙橘固此守家持作二首」という題詞がある。
- (3) 『萬葉考』には、「今本こゝに三月二十九日とあり、既はし辞に四月と有に、又月日を書へきいはれなし、後人のさかしらしるければすてつ」とある。
- (4) 橋本万平「萬葉時代の暦と時制」(『萬葉集講座』第二巻、有精堂)。
- (5) 「凡そ陰陽寮は、年毎に預め来年の暦造れ。十一月一日に、中務に申し送れ。中務奏聞せよ。内外の諸司に、各一本給へ。並に年の前に所在に至らしめよ」(雑令六、日本思想大系『律令』)。
- (6) 植木久行「ほととぎすのうた 杜鵑と郭公をめぐって」(『比較文学年誌』第十五号、一九七九)。
- (7) 青木正児「子規と郭公」(『青木正児全集』第八巻)。
- (8) 「七十二候で立夏節の最初に出て来るのは蝮蟬鳴(かはづ鳴く)なのであるが、家持はこれを日本的に修正して「ほととぎす鳴く」にしたのであらう」(関守次男「家持の季節感と曆法意識」、『山口大学文学会誌』十五一、一九六四)。

- (9) 『中国野鳥図鑑』(一九九六)、『中国鳥類迁徙研究』(一九九六) 参照。
- (10) 『萬葉集釈注』には、渡瀬昌忠氏の「家なき名將「霍去病公の鳥」という意味で、日本人が発明した表記ではないか」という試案(巻第十二、三二六五釈文)と、小島憲之氏の「霍」は雨の佳よでホトトギスの鳴く頃を思い出させる書記ではないか」との案(巻第十七、三九〇九注)が紹介されている。
- (11) 『類聚名義抄』では、「布穀」は「ツキ」になっている。「ツキ」はトキの古名だという。「鴈音」ハ鳩、布穀コクツキ(観智院本『類聚名義抄』僧中一二三)。
- (12) 注(7)参照。
- (13) 川口爽郎『萬葉集の鳥』(一九八二、北方新社)。
- (14) 『貝原益軒全集』六。カクコウを「蚊母鳥」と表記することもあるが、「蚊母鳥」はヨタカ。『大和本草批正』に、「かっこうは蚊母鳥に非ず。つゝとりも亦別なり」とある。
- (15) 山階鳥類研究所編『世界の鳥の和名Ⅷ―中国の鳥(改訂版)―』(一九八三) 参照。
- (16) 『新註校訂国訳本草綱目』補注参照。
- (17) 鄭作新『中国的鳥類』(一九五二、商務印書館)。
- (18) 『本草綱目』「鴈鳩」には、「二月穀雨ハ后始鳴。夏至后乃止」とある。二十四節気の穀雨は「三月中」であるので、「三月穀雨ハ后始鳴」の誤字か。
- (19) 坂本太郎『荆楚歲時記と日本』(坂本太郎著作集 第四卷所収) 参照。
- (20) 伊藤博氏は、古代にほととぎすには「名告り鳥」という呼称があったかもしれない可能性を述べている(「名告り鳴く」、『萬葉集研究』第二十二集所収)。